



TITLE:

史的唯物論略解(一)

AUTHOR(S):

河上, 肇

CITATION:

河上, 肇. 史的唯物論略解(一). 經濟論叢 1921, 12(2): 332-337

ISSUE DATE:

1921-02

URL:

<https://doi.org/10.14989/127746>

RIGHT:

京都市帝國大學經濟學會 經濟論叢

第二號

第二十卷

論 說

戰時戰後に於ける獨逸稅制變革……………法學博士 小川郷太郎

地方稅としての所得稅の重要……………法學博士 神戸 正雄

勞賃と勞働生産力との關係……………法學博士 田島 錦治

文明史に關する論爭……………法學博士 財部 靜治

植民地の財政政策に就きて(四)……………法學博士 山本美越乃

時 論

當平倉運用の標準……………法學博士 戸田 海市

說 苑

京城六矣廬に就いて……………經濟學士 黒 正 巖

雜 錄

史的唯物論略解……………法學博士 河 上 肇

富といふ支那字に就て……………法學博士 河 上 肇

新著 紹介……………法學士 本庄榮治郎

雜 錄

史的唯物論略解(二)

河 上 肇

本篇は Borchardt, Der historische Materialismus. Eine für Jedermann verständliche Einführung in die Materialistische Geschichtsauffassung. 1919. の主要なる部分を抄譯したものである。原本は僅か三十二頁の小冊子で、その題名の又書にも示せる如く、通俗易解を旨としたものであるから、學問上重きかならず者では無いが、しかし史的唯物論(又は唯物史觀)の要領を簡単に書き上げたものとしては、類書中最も善く出来てあるもの、一であるから、何人かの參考になる點もあらうかと思つて、其の肝要の部分を茲に紹介する次第である。原文は五章から成り立つてゐるが、此の抄譯はその中の第二、第三、第四の三章に限り、且つ本號に載す所は、右の中の第二章に相當する部分で、その第三章及び第四章に相當する部分は、一纏めにして之を次號に載す積りである。抄譯文に用ひたる總ての標題は、抄譯者の勝手につけたものである。

第一、史的唯物論の誤解

吾々は先づ此の第一段に於て、史的唯物論は斯く／＼のものに非ず、と云ふことを述べ、然る後第二段に入りて、史的唯物論とは斯く／＼のものなり、と云ふことを述べる積りである。

A 史的唯物論は歴史上の出來事を人間の利己的衝動によつて説明しやうとするものではない。

吾々マルクス主義者が、既に述べた理由から(譯者註、其の理由は第一章の『歴史とは何か、

——有産者の又は精神的史觀』と題する所に述べてあるが、此の譯文には全部之を省略して仕舞つた)、精神的史觀 ideologische Geschichtsaufassungを排斥し、歴史の進行をば他の原因から説明し、それをば『物質』の中に、即ち人間の『物質的慾望』の中に求めんとする時、反對論者は激しく吾等を攻撃する。彼等の考ふる所によれば、史的唯物論(唯物史的史觀)は歴史の進行をば人間の有する低級の本能によつて説明せんとするものである。人間の總ての行動は——彼等反對論者が史的唯物論の内容として叙述する所に

よれば——經濟的利益により、即ち利己的動機によつて規定せらるゝものである。誰でもが、先づ、どうしたら最も多く自分の利益になるかと云ふことを考へて見て、それに従つて行動する。所謂『偉人』といへども——精神的史觀を採る者は、此等偉人の行動が世界史の内容を構成するものゝやうに考へてゐる——常に只彼等自身の利益を考へてゐるばかりである、從て彼等の利己心が歴史の本來の動力である。吾等の反對論者は、史的唯物論を以て、以上の如き主張を爲すものと想定してゐる。さうして斯かる想定に本づき、彼等は更に論じていふ、しかし幸にも此の低級なる解釋は全然誤解である。人間はそんな野卑なものからばかり出來上つてゐる譯ではない、人間の胸にはより高尚な感情が宿つてゐる、偉大なる目的への奉仕、眞善美に對する感激、公共の利益の爲めの犠牲、博愛心愛國心等が即ち其れである。總て此等高尚なる動機は一樣に人間の行爲に對し有力に影響するものなのだから、人間の行爲は決して物質的欲

望にのみ、飲食の欲求にのみ、歸着せしめ得るものではない。吾等の反對論者は、吾等に向つて、斯かる駁論を加へつゝあるのである。

史的唯物論に對する斯かる曲解が、單に日常の煽動に於てのみ行はるゝのであれば、吾々は必ずしも驚くに足らぬけれども、吾々は最も眞面目な學問上の著作に於て、屢々此種反對論に出會ふのである。今、史的唯物論にして、果して斯かる主張を爲すものとすれば、之を否認するは勿論甚だ容易なことである。必ずしも過去の歴史と言はず、日々吾々の眼前に起る現在の事實に對し、極めて表面的の瞥見を與へただけで、吾々は、それが誤謬であることを悟り得る。

勿論、人間の一切の動靜が、殆ど其の各瞬間に於て、全然己れ自身の利益の顧慮によつて指導されてゐると云ふことは、爭ふべからざる事實で、唯パリサイの徒のみが之を否認し得る。

現に吾々は、今日種々の職業に従事して、それが爲めに大部分の時間を潰してゐるが、それは

何故かと言へば、金儲のため、即ち直接の、個人的、經濟的の利益を擁護せんが爲めである吾々はさうして行かなければ、零落して仕舞ふ吾々が若し零落の刑罰を受けることなしに、自分の時間をば純經濟的行爲以外の仕事のために費さうと思ふならば、金持の親を有つて生まれなければならぬが、それは極めて少數の人にのみ惠まれてゐる幸運である。だから吾々が、現在の生活關係總體をば、極めて簡單に特色づけやうと思ふならば、各人は各自の利益を追求してゐる、と云ふ命題の外に、より善い言ひ表し方はない。

併し、人間の活動の遙に大なる部分が己れ自身の利益の追求から成立つ、と云ふことを、否認するのが誤謬であると共に、それに沿うて又他の顧慮が働いてゐる、と云ふことを、否認するのも亦同様に誤謬である。殆ど總ての人間は間斷なく己れ自身の利益を顧慮してゐるが、しかし其れでも尙ほ若干の例外に屬してゐる人が在る。又大多數の者は殆ど全く且つ殆ど常に自

分自身の經濟的利益を考へてゐるが、しかし結局は何人にでも若干の暇があつて、その時には又他の考に耽り得るものである。しかるに此の如き例外と制限とを認めなければならぬと云ふ事は、目下の狀態を甚だ正しく言ひ表してゐる所の上記の命題をば、歴史の説明 *Geschichtserklärung* としては用を爲すに至らざらむる、何故といふに、若しも人間の一切の活動が經濟上の利益によつて導かれてゐるのでないならば、歴史上の著明の出來事は恰も斯かる例外であつたと云ふことが、十分に主張され得るからである。歴史上に著明の働きをしてゐる人々は、恰も高尚な性格の所有者であつて、大多數の人々の有つてゐる低級の動機からは遙に超越してゐたと云ふことが、在り得るからである。近い例を挙げれば、有力なるマルクス主義者たりし牛ルヘルム・リーブクネヒトの如き 彼にして若し政府の御用記者となつたならば、夥しい報酬を得たに相違ないのである。しかも彼は一生を通じて、彼れ自身の經濟的利益に反して行動し

た。其他社會主義の運動に與つた有力者は、誰でもが皆、長い間牢獄の生活をしたものであるが、それが彼等自身の經濟的利益に反したことは、固より言ふまでもない。

此の如く、歷史上著明の人が己れ自身の利益に反する行動を敢てしてゐると云ふことは、誰にでも分る自明の事實で、吾々マルクス主義者と雖も、其れ位のことば夙くに心得てゐるのである。しかるにも拘らず、吾々が敢て史的唯物論を固執して動かぬのは、果して何故であるか。それは、史的唯物論なるものは、反對論者の考ふるが如きものと、全く別種の學説だからである。

B 史的唯物論は歷史上の出來事を經濟狀態から説明しやとするものでも無い

反對論者の多くが、史的唯物論の内容だと考へてゐるものは、以上述ぶるが如く、根本的に間違つてゐるが、それと同時に、史的唯物論の主張者そのものゝ中にも、之と同様に間違つた考を抱いてゐる者が稀でない。過去、現在、未

來に亘り、一切の出來事をば、總て『經濟狀態』ökonomische Verhältnisseによつて説明せんとする説の如きは、即ち其れである。此説は、史的唯物論の反對者が所謂偉人豪傑の一舉一動によつて歴史の進行を説明せんとするに比ぶれば、遙に優れる所が在る、と言はなければならぬ。此説に従へば、社會の指導者たる者の有する偶然なる性質とか又は其の時々の氣分とかが、歴史的事件の原因ではなくして、寧ろ指導者の意志そのものが——一般の人間の意志と同じやうに、——その時代の經濟狀態によつて規定せられ、それに依存してゐると云ふのである。

しかし此説も、少し深く考へた批評に對しては、到底對抗することの出來ぬものである。第一に、謂ふ所の『經濟狀態』とは本來何を意味するかと云ふことが極めて曖昧である。それは個々の個人の經濟狀態を指すのであるか？——疑もなく、其事が屢々意味されてをる。勿論人間は明かに其の生存狀態の產物であつて、彼等の考は彼等の外部の狀態と共に變化するものであ

る。例へば、貧乏人であつた時には狂暴なる革命主義者であつたものが、段々その生活状態が善くなるにつれて、次第——に温和な考を有つて来るやうになると云ふことは、吾々が屢々實地に見聞する所である。そこで歴史の進行をば經濟状態によつて説明せんとする思想が生ずるのであつて、さうして其説に従へば、人間は其の時々の外界の状態を本として一定の考を有ち、彼等は又その考を本として行動するもので、それによつて歴史の進行が生ずる、と云ふのである。

しかし經濟状態説が若し斯ういふのであるならば、それは史的唯物論の反對者が抱いてゐる思想と、さして大差のないものになる。何故といふに、此説に従へば、歴史の進行を左右する所のものは、矢張り人間の思想に外ならぬと云ふことになるから、詮じ詰めたならば、物質的史觀ではなくて、矢張り一種の精神的史觀になつて仕舞ふからである。人間が高尙な考を有つか又は下等な考を有つかによつて、彼等は或は

高尙な行動を採つたり或は下等な行動を採つたりする、——さうして其れにつれて、彼等は歴史を或は善く或は惡く『作る』と云ふのが、此説の歸着點だからである。勿論、行爲の源たる思想は、此説に従へば、當事者の生活状態の上に基礎を有つてゐると云ふのであるから、單純なる精神的史觀よりは、一步突き進んだ所があるけれども、しかし其の個々人の生活状態なるものは、無數の偶然によつて左右されてゐるのだから、よし此説に従ふも、歴史の進行は依然として偶然的のものになつて仕舞ふ。例へば所謂偉人豪傑の或者が、決定的の瞬間に、急に巨萬の財産を相續したとか、或は富豪と結婚したとか云ふことになれば、その爲めに世界史の進行は大影響を受けることになる筈であるが、それは恰も、かの精神的史觀を探る者が、例へば佛蘭西史の説明に當り、ルイ十四世が非常に名譽心の強い人であつた爲めに、全國民が其の影響を受けて、彼れの治世の下に佛蘭西文化の極頂に達したなどと言ふのや (Becker, Allgemeine

Geschichte, 3 Aufl. 1892, Band. S. 512 參照) 同じやうに、偶然的に或る個人の有つた性質や氣分や思想の上に、社會史の進行の決定力を歸せしめやうとするものであつて、吾等の到底是認するを得ざる所である。

要するに、個々人の物質的狀態が世界史の動力を左右すると云ふ思想は、根本的に廢棄しなければならぬ。ところが此説の代表者の中、更に深い考を有つてゐる人々は、吾々に對して答へていふ。吾等の主張する所は、それと全く相違してゐる、吾等の謂ふ所の『經濟狀態』なるものは、其の時代全體の經濟狀態である。此説に従へば、歴史の進行の上に決定的の働きを爲すものは、個々の個人の經濟狀態の善し惡しではなくて、只生産及び消費に關する總體の狀態、總ての人々の間に生じ來る人的及び物的の諸關係である。此等のものよりして利害の共同及び利害の對立が生じ、種々の國民の間に利害の衝突が生じ、又同じ國民の内にも、或部分は共同の、又或部分は反對の利害を有する所の種々の

團體、階級が成り立ち、さうして此等の對立及び結合から、様々の歴史的事件、即ち戰爭や、同盟や、立法や、發明及び發見や、農工商業の發達やが起る、と云ふのである。

此の考へ方は、前のものに比べて、遙に合理的だと謂はなければならぬ。しかし——何處に其の證據が在るか？、只理屈に合ふらしく見えるだけの説を主張したのでは駄目であつて、歴史そのものから其の證明を得て來なければならぬ。しかるに私の知る限りに於ては、一定の出來事が『經濟狀態』から發生したと云ふことを、一つ／＼正確に指示し論證することは、今日まで曾て行はれたことが無いやうである。且つ少くとも歴史的事件の甚だ重要な或る一系列に對しては、此種の論證は到底不可能のやうに考へられる。

試に之を一定の事例に就いて説明するならば例へば、一八七〇年又は一八六六年の大戰爭が當時に於ける全體の經濟狀態から發生したと云ふことは、考へ得らるゝことである。勿論、既

爲つて仕舞ふのである。

以上述べ來つたやうに、史的唯物論は、其の反對論者によつて、歴史上の事件をば人間の利己的衝動によつて説明せんとするものなるかに誤解されてゐるが、しかし歴史上の事件は決して此の如き方面より説明され得べきものでもなく、又史的唯物論なるものは決して此の如き主張を爲せるものでもない。又史的唯物論は、その支持者の或者によつて、歴史上の事件をば當時の經濟狀態から説明せんとするものゝ如くに主張されてゐるが、しかし歴史上の事件が決して此の如き方法によりて説明され得ざるものなることは、以上纒述したるが如くであり、且つ吾々の見る所によれば、史的唯物論なるものは決して此の如きことを主張するものでもない。しからば史的唯物論の主張は何處に在るか。章を改めて其れに説き及ぶであらう。